学会報告

第15回日本医療マネジメント学会報告

常任理事　医療安全・医事法制部長　水谷　匡宏
常任理事　医療安全・医事法制副部長　橋本　洋一

さる６月14日、15日の２日間にわたって、標記学会が岩手県盛岡市で開催された。初日が平日でしかも地方都市での開催にもかかわらず、３千人を超える参加者があった。

今学会は望月泉会長(岩手県立中央病院院長)のもと開催された東日本大震災津波のあとでもあり、「とりもどそうあたたかい故郷を－地域との協働で拓く医療の未来－」がメインテーマとしてとりあげられた。特にこれまでも重点的に取り組み、成果をあげているクリティカルパス、医療の質、医療安全、地域医療連携などに加え、チーム医療、感染対策、DPC、ICTについてもシンポジウムがあり、活発な意見交換が行われた。

その中で、特に印象深かった長谷川俊彦氏(日本医科大学 特任教授)の教育講演『日本の医療安全の過去と未来「遅すぎた革命」患者安全革命、そして「未だ来ぬ革命」を展望する』について報告する。

講師の長谷川氏は厚労省で長年にわたり、医療安全について取り組んできた行政畑のエキスパートであるが、講演ではこの15年を振り返り、予想だにしなかった医療事故の頻発が社会問題化し、いったい何が起きたのか、国をあげての取り組みは功を奏したのかと言う自問自答の連続があったと述べた。しかし、2005年を契機に医療事故関連の新聞記事は減少に転じ、医療訴訟も減少に転じたが、はたして現場での事故は減少したのだろうか、病院経営の転換と重なり合いながら、何に取り組み、何を達成し、まだ何をなし遂げていないのであろうか。また、2030年のランドマークイヤー(過去最大の高齢者数)に向かって、医療体制や社会の仕組みは今後５年から10年でガラッと転換すると想定されるが、医療安全に「何が起きるのか」まさに今こそ医療安全活動の蓄積を振りかえって総括し、これからの在り方を展望する時期であると強調した。

さらに、欧米を発信源とする「患者安全革命」(Patient Safety Revolution) が日本をはじめ、世界に広がったが、その宣言文は「人は間違うもの」(To Err is Human) にほかならなく、その中で「事故の考え方の革命」が謳われたと結論づけた。最後に「これから何が起きるのか」の答えはいまだ確立されていない「もう一つの革命」であり、おそらく、それは“長いおもてなしの伝統”のある日本から発信されるであろうと締めくくった。(水谷)

２日目午前中の教育講演３「社会保障制度改革と医療」(田中滋 慶応義塾大学教授) は、ハーバード白熱教室のマイケル・サンデル教授さながらの壇上を縦横無尽に移動しながらの講義は大変印象的で目を釘付けにする効果を持っていた。

日本における社会保障のあり方は消費税の論議からみても、「中負担・中福祉」が現実的な選択であると考えられる。社会保障のサイズ（給付）は、医療給付費35.1（2012年）→54兆円（2025年）(対GDP比7.3→8.9%)、介護給付費8.4→19.8兆円（1.8→3.2%）で医療・介護給付費両者で9.1（12年）→12.1%（25年)、年金給付費等も含めた社会保障給付費は109.5（12年）→148.9兆円（25年）にのぼる。社会保障関連に従事する人口は467万人（12年）→732万人（25年）で、1.6～1.8倍の人材が必要であると試算されている。今後も医療・介護のニーズは増え続け、雇用の受け皿として期待されているが、ニーズに直面していない人も保険料を払っているという現実を認識しておくべきであると最後に強調された。

樋野興夫順天堂大学教授による『新渡戸稲造がん哲学外来の到来』の講演は２～2.5人に１人ががんで死ぬという現在にマッチした大変教訓的な講演であった。「協調・協力こそが力なり（UNION IS POWER)」という新渡戸稲造の言葉が象徴的に聞こえた。演者は腫瘍病理学の専門家とは思えない精神の持ち主で、ゆったりとした雰囲気で患者と対話できる資質も有する「暇げな風貌」をした人で他人の必要に共感でき、他の人々に注意を向けることができる「偉大なるお節介」である人こそが、がん患者が必要としている医師像なのだとたんたんと説得力を持つ静かな佇まいで述べられた。

今回の学会の最後を飾ったのは、『いま、なぜ希望を語るか』ノーベル文学賞受賞者の大江健三郎氏の講演であった。友人 井上ひろし氏との９条の会の行動について語りながら、現在の日本政府の原発再開は経済を優先させることしか考えていない政策であり、子孫がいつまでも安全に生活できる環境を守ることが私たちの義務であるとの言葉は、われわれ聴衆の心にいつまでも残る大変重い言葉として沈殿した。(橋本)